高等学校教材

教材としての三味線音楽

教科教育部　鎌　田　昭　治

1．はじめに

高等学校における「日本の音楽」は従来からも取りあげられてきてはいたが，今度の高等学校新学習指導要領の改訂で，より具体的に

(1)　中学校第３学年で取り扱うこととしていた「義太夫節」を高等学校の鑑賞教材として取り扱うよう示したのをはじめとし，

(2)　郷土の民謡，郷土の音楽，さらには民族音楽をも鑑賞教材として取り扱うよう明記するなど，中学校との関連をはかり，

(3)　日本の伝統音楽を第１学年では箏曲，三味線音楽，尺八音楽を

(4)　第２学年では，能楽，義太夫節，琵琶楽を取り扱うこととし，

(5)　第３学年においては，生徒の特性，地域の実態に応じた取扱いをするよう示された。

我々は，ともすると，日本の音楽は教材化しにくい，どう展開させてよいかわからない，コトバが理解しにくいのではないか―という危惧（きぐ）の念が先に立って，躊躇（ちゅうちょ）していたように思えるのである。

しかし，中学校では，すでに「小鍛治」「観進帳」「三十三間堂棟由来」等，共通教材としてとりあげられ鑑賞されているとき，中学校の延長線上としての高等学校でも，日本の音楽を積極的に取りあげることが急務であろう。

以上の鑑賞教材の配列でもわかるように，日本の伝統音楽の中で，三味線音楽の占める割合は大きい。そこで三味線音楽の「唄いもの」と「語りもの」について，楽曲分析と指導案を以下に示してみることにした。

2．三味線音楽～唄いもの～について

音楽Ⅰにおいては，中学校の鑑賞教材の延長として，主に「唄いもの」を取り扱うこととし，ここではそのうちの「長唄」に焦点をあてることにした。

(1)　長唄の歴史について

長唄は検校・勾当らによって歌われた上方長唄と区別し江戸長唄とよばれ，歌舞伎のための音楽として生まれた。元禄の頃（1680～1704）京都から杵屋勘五郎が歌舞伎役者と共に江戸へ来て，芝居の伴奏に歌ったのがはじまり（諸説がある）といわれている。以後，享保の頃に動作に合わせて伸縮の自在な唄い方の「メリヤス」がおこり，急速に発展し，長編の歌曲を生み，踊りの伴奏に用いられるようになった。「娘道成寺」「観進帳」「小鍛治」などは歌舞伎にともなうものである。又，江戸時代後期には芝居を離れて独立した「お座敷長唄」がおこり，「秋の色種」「吾妻八景」など名曲が生まれた。

(2)　伴奏音楽について

長唄では，伴奏の三味線の活躍が著しく，かなり長い器楽的な部分を「合の手」として用い，それに替手あるいは上調子を添えて複音で奏することが多い。

長唄には，囃子（はやし）を伴うものと，用いないものとがあり，歌舞伎では笛（能管）小鼓，大鼓，太鼓を用い，場合によっては柔らかい音色の篠笛を用いたり，種々の楽器を陰で用いたりする。

(3)　長唄の特徴

①　長唄は，概して華麗多彩である。

②　舞踊の伴奏が大部分なので，単なる歌詞の音楽化でなく，舞踊的性格が著しい。

③発声は，比較的開放的で，胸声が多く裏声はあまり使わず，喜怒哀楽の声の極端な使いわけもない，明瞭，淡白，平明な声である。

④　三味線は細ざおで，糸は細く，こまは小さく，ばちは軽いもので，ばちさばきのみごとさに特色がある。

(4)　長唄「吾妻八景」の楽曲分析

①　選曲の理由

ア　三味線歌曲の二大様式（地唄と長唄）のひとつである長唄の中の名曲である。

イ　お座敷長唄の代表作である。